令和３年10月22日（金）令和３年度第２回発掘調査遺跡現地説明会資料

囲裏窯跡

（かこえうらかまあと）

所 在 地：水戸市見和１丁目356番地14ほか
調査期間：令和３年８月１日～11月30日
調査面積：3,966㎡
委 託 者：水戸土木事務所
調査原因：一級河川沢渡川河川改修事業
調査機関：公益財団法人茨城県教育財団（水戸事務所）
℡029-225-6587　http://www.ibaraki-maibun.org

遺跡の立地と窯跡の分布

囲裏窯跡は、水戸市の中央部、沢渡川左岸の標高約23mの台地上および斜面部に位置しています。

遺跡周辺には、縄文時代の釜神（かまがみ）遺跡や柳崎（やなぎさき）貝塚、弥生時代の見川塚畑（みがわつかはた）遺跡、古墳時代の愛宕山（あたごやま）古墳群、千波山（せんばやま）古墳群、奈良・平安時代の台渡里官衙（だいわたりかんが）遺跡群や見和一丁目遺跡、室町時代の見和城跡などが所在し、那珂川や桜川・沢渡川沿岸の台地上を中心に古くから人々の生活が営まれていた地域です。『水戸藩史料』によると、江戸時代末期に水戸藩主徳川斉昭によって偕楽園内に七面製陶所が開かれた記録がみられます。出土遺物や遺跡の立地から、囲裏窯跡はほぼ同時期の開業と考えられます。

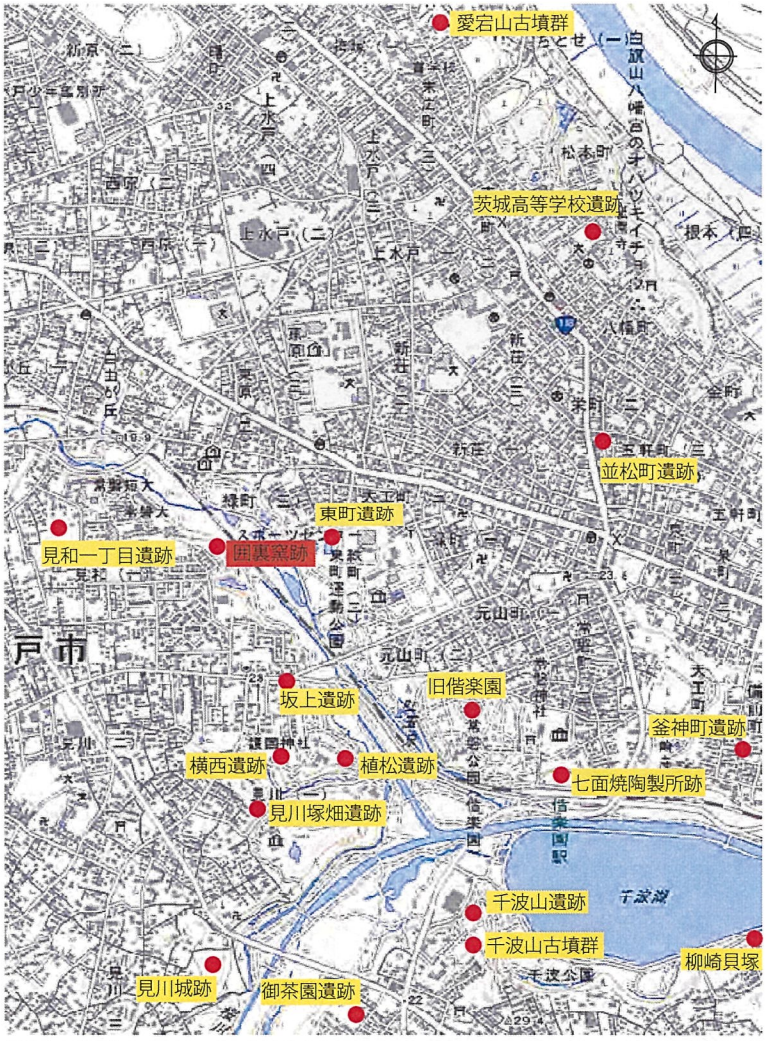
調査の成果

今回の調査では窯跡４基と窯跡に関係する掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）跡１棟、土坑14基、溝跡11条を確認しました。これらのほかには奈良時代の竪穴住居跡１棟、縄文時代の陥し穴11基などを確認しています。

窯跡は、平坦部と斜面部に構築されています。平坦部では、レンガで構築された一辺1.2mの平窯跡を確認しました。平窯跡の周囲には柱穴が並び、上屋（掘立柱建物跡）を伴っていたことが分かりました。また周辺には、水溜めと思われる粘土貼り土坑を数基確認したことや素焼きの製品が出土していることなどから、これらの遺構が工房跡の一画であると推定されます。

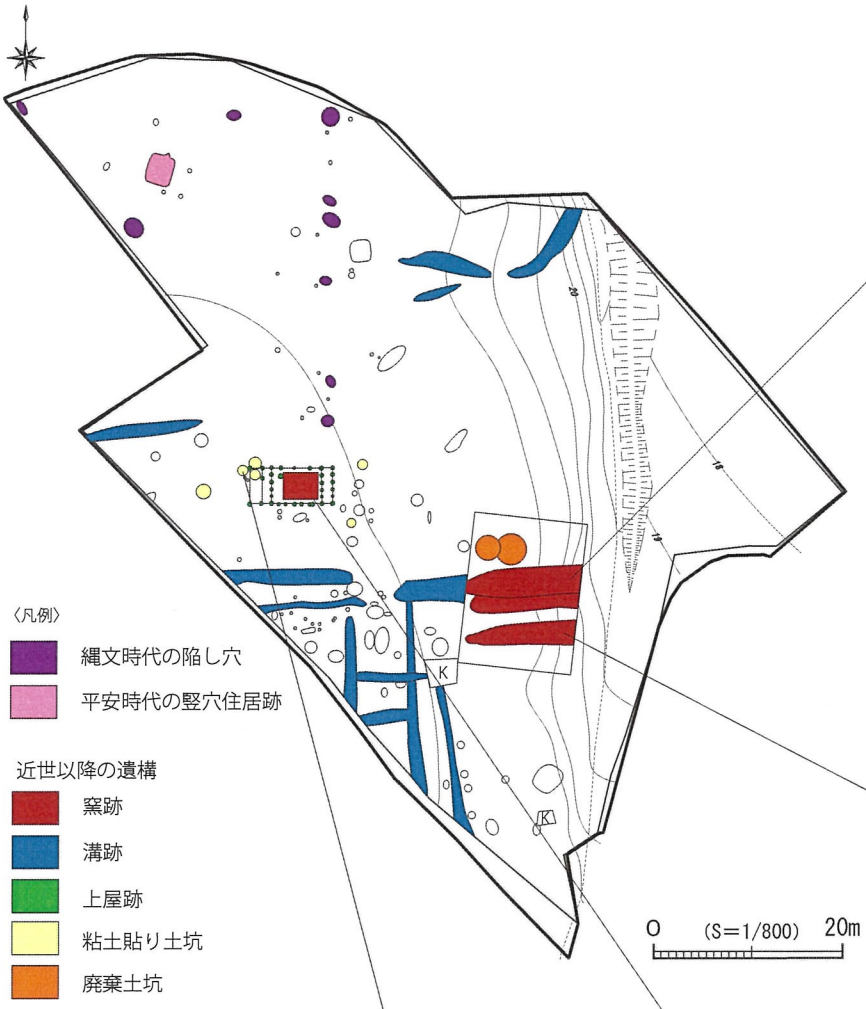
斜面部では、連房式登窯跡３基を確認しました。燃料を燃やす燃焼部は失われていますが、製品を焼くための燃成部が残存しています。周辺には構築材のレンガ片やツクやトチなどの窯道具が多量に散在していたことから、窯の廃業に伴い取り壊されたと考えられます。

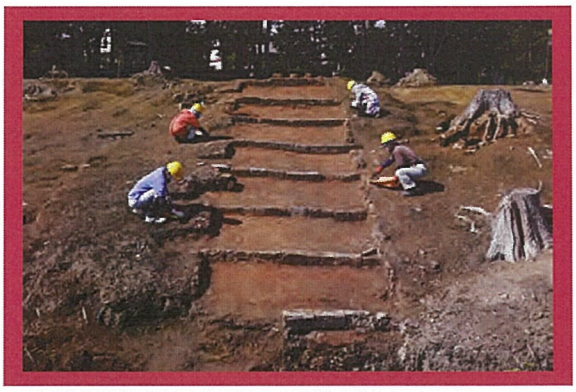
出土した陶器には擂鉢や折縁鉢、植木鉢、急須などの日常雑器の破片が多く、七面焼にみられる刻印がみられないことから、下級武士や庶民に供給されたと考えられます。



囲裏窯跡周辺の主な遺跡（国土地理院1:25,000「水戸」を引用・加筆）

この資料は，調査中の情報であり，最終的な結果ではありません。資料の引用・掲載はご遠慮願います。





第１号窯跡（連房式登窯）

調査区南側斜面で確認した連房式登窯です。
全長は 10.5m、幅 3mで、煙道部や、レンガで
仕切られた燃成部を確認しました。

第２号窯跡（連房式登窯）

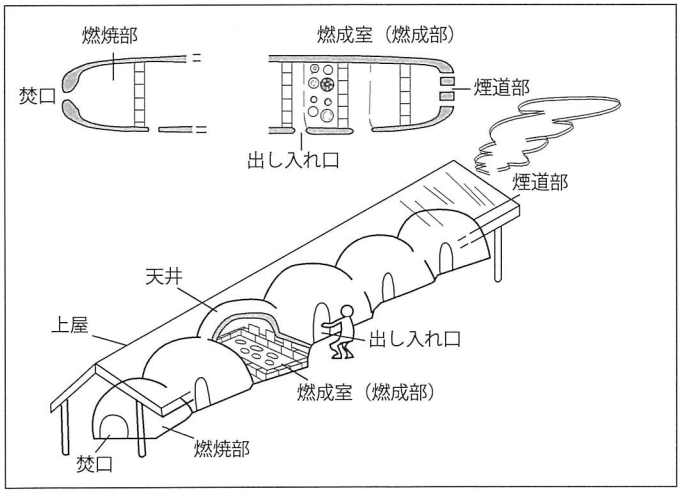
第１号窯跡の南側で確認した連房式登窯です。
全長は 10m、幅 2.7mで、燃成部が確認できました。

第３号窯跡（平窯）

レンガで組まれた１辺 1.2mほどの小型な窯です。
釉薬をかける前に素焼きをした窯と考えられます。
周辺では上屋を支える柱の跡を確認しました。

第 14・15・16 号土坑（粘土貼り土坑）

底面に粘土が貼られた土坑で、水溜めに使用された
と考えられます。



連房式登窯　イメージ図

出土した窯道具のトチとツク

窯で焼く際に床面と製品の間や、重ね焼きをする際の
製品間に置いて使用するトチとツクが多く出土しました。